

「性の知識の習得過程に関する研究」 —知的障害児と健常児における比較検討—

柳澤 志萌*・綿 祐二**

Key Words: 性, 性知識, 知的障害児

知的障害児と健常児は両者ともに性について正しい知識を習得することが重要とされていることが挙げられている。しかし、健常児の性の知識の情報源等は明らかになっているが、知的障害児の性の知識の情報源は明らかになっていない。また両者ともに、性知識の習得時期や各性知識が現在までにどの程度習得されているか調査されていない。

そのため、本研究は知的障害児と健常児の性知識の習得時期、情報源の実態及び差異を明らかにすることを目的とした。また今回の研究は性教育における性のみならず、一般社会における性知識の習得過程について明らかにすることを目的とした。

本研究の主な結果は、以下の通りであった。

- 1 「結婚までの過程」、「性交 (sex)」、「妊娠」、「出産」については知的障害児の方が早い段階から知識を習得している者が数名いるが、全体の傾向を見ると健常児の方が早くから知識を習得している者が多かった。
- 2 情報源については、健常児は14項目中8項目が「学校の授業」の次に「友人」から知識を習得している割合が多かった。しかし「月経」の項目については、「学校の授業」の次に「親」が情報源として多かった。また知的障害児は、14項目中8項目が「学校の授業」の次に「テレビ・ビデオ」、「親」が多かった。
- 3 本研究で調査した性知識の習得状況は、健常児と比較して全て知的障害児の方が習得していないという結果であった。

1. 研究の背景および問題の所在

ニーリエは、ノーマライゼーションの8つの原理を明らかにし、どんなに障害が重い者も、

* 大学院人間学研究科

** 人間学部人間福祉学科

8つの生活条件のなかで暮らす権利があり、行政や社会はそれを実現する権利があるとした。しかし8つの原理の1つでもある「その文化におけるノーマルな性的関係」が、近年脅かされている。

木戸ら(1998)は「小児神経外来には思春期を過ぎ、成人期に達した知的障害をもつ女性が、種々の問題(薬剤内服、健康状態 etc.)をもちながら結婚につながらない妊娠の相談に来ることもまれではない。このとき避妊について問うと悲しいぐらい知識をもちあわせていないことがほとんどである。あいまいな知識がある場合でもそれをパートナーにどう伝えていいかわからない。」と述べており、知的障害をもつ女性が避妊などの知識をもちあわせていないため、望まない妊娠に至るケースを挙げている¹⁾。さらに木戸らは「昨今、障害児者の自立および自立支援が障害児者支援のキーワードになっている。性にかかわる自立を考える際、特に女性にとって性に関する自己決定権の保障は最重要課題である。」と述べている¹⁾。つまり自立支援を考えていく過程において、性について知識を習得することが重要である。その反面、健常児について性の知識についてどのように捉えられているかという点、光本ら(2004)は「思春期の若者の望まない妊娠や性感染症の予防には、性に対する正しい理解がなされ、知識として定着していくことが必須である。」と述べている²⁾。知的障害児と同様に、望まない妊娠等を防ぐために性知識を正しく理解することを主張している。

また光本らは健常児の性知識に関する調査を行っており、「性知識の情報は学校から得ているものが最も多く15項目中12項目が第1位を占め、マンガ、テレビ・ラジオ、ビデオを性知識の情報源としていた者は少なかった。情報源の第1位が友人・先輩だった項目はコンドームの使い方、マスターベーションについての2項目のみであったことは、これらが学校教育では教えにくい内容であり、指導からはずされやすいためではないかと推測する。」と述べており、性知識の情報源については「学校の授業」以外からも様々な情報源をもとに知識を習得していることが分かる²⁾。

2005年の財団法人日本性教育協会では第6回「青少年の性行動全国調査」が行われている。この調査では、中学生、高校生、大学生を対象に「男女交際」、「性交」、「避妊」についての情報源を調査した。「男女交際」と「性交」の情報源第1位は友人、「避妊」の情報源第1位は授業や教科書であった。光本らの調査の共通点として、情報源第1位は「友人」から得たという情報源」ということが明らかとなっている³⁾。

以上のことから、知的障害児と健常児は両者ともに性について知識を習得することが重要とされていることが分かる。しかし、健常児の性の知識の情報源等は明らかになっているが、知的障害児の性の知識の情報源は明らかになっていない。また両者ともに、性知識の習得時期や各性知識が現在までにどの程度習得されているかプロセスが明らかになっていない。

そのため本研究は知的障害児と健常児の性知識の習得時期、情報源及び差異の実態を明らかにするために着手した。また今回の研究は性教育における性のみならず、一般社会における性知識の習得過程について明らかにすることを目的とした。

本研究の質問項目は、先行研究をもとに性知識に関する項目を選択し、「男子と女子の体のしくみの違い」、「第二次性徴」、「月経」、「精通」、「マスターベーション」、「結婚までの過程」、「性交 (sex)」、「妊娠」、「出産」、「避妊」、「中絶」、「売春」、「後天性免疫不全症候群 (エイズ)」、「性感染症」の14の性の知識について調査を行った。

林ら(2004)の研究において、養護学校職員を対象とした校内性教育研修会で行われている研修内容の結果では「「エイズ」、「思春期」、「二次性徴」が60件前後と最も多かった.」、「避妊」、「家族計画」は最下位だった.」と述べており⁴⁾、研修の中では主に身体の性徴に関する知識が多く取り上げられ、「避妊」や「家族計画」といった望まない妊娠や感染を予防することや将来について考えることは二の次にされていることが分かる。また児島(1998)は各性知識の項目について「学校の授業」以外で得た知識の習得過程、情報源を明らかにしていない⁵⁾。加えて、性知識は教育の中だけではなく日常生活のなかで偶然に情報を得ることも考えられるため、「売春」など今まで教育の中ではあまり触れられていない項目についても、本研究において性知識の項目として追加した。

以上のことから、本研究における調査では先行研究をもとに、現在性教育において教授されている性知識のみならず、一般社会における性知識の項目も含めて上記の14の性の知識にしばりこんだ。

なお本研究で使用する用語について、「健常児」という用語は満18歳以下の児童、「知的障害児」という用語は満18歳以下の知的障害を有する児童とする。また「性知識」は、性の知識を与えるもの全てを指す。よって、性教育、家族、教師、雑誌、友人との会話等、メディア(テレビやビデオなど)等も含むものとする。

2. 本研究の目的

本研究は知的障害児と健常児の性知識の習得時期、情報源の実態及び差異を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

1 調査方法

(1) 調査対象

15歳から18歳までの養護学校に通う生徒157人、普通高等学校に通う生徒216人を対象とした。

(2) 調査手順

先行研究をもとに性知識に関する質問紙を作成し、プレテストを行った。その後、知的障害児に対しては集団面接法による質問紙調査法を実施した。集団面接法では、本研究者以外に6

名の協力のもと各養護学校で調査を行った。健常児に対しては質問紙調査法を用いて実施した。

(3) 調査期間

知的障害児に対しての集団面接法による質問紙調査については、2007年9月から10月にかけて調査を実施した。健常児に対しての質問紙調査については、2007年9月から10月にかけて調査を実施した。

2 調査項目

(1) 尺度について

質問紙の性知識の習得状況についての質問項目の尺度はリーカットタイプの5段階尺度(1 まったく知らない, 2 知らない, 3 どちらでもない, 4 知っている, 5 非常に知っている)を用いた。

(2) 分析の枠組み

本研究は性教育で取り扱う知識だけではなく、社会一般における性知識について14の性の知識を42の項目について調査を行った。

性知識の習得時期、情報源については、各項目の性知識習得状況で「知っている」又は「非常に知っている」と回答した者のみに回答をしてもらった。

分析方法はまず、単純集計によって知的障害児と健常児が性知識の習得状況、習得時期、情報源を把握した。次に性知識の習得状況についてt検定を行い、両者の差異を検討した。

4. 結果と考察

1 性知識の習得時期と情報源

以下、4項目(「男子と女子の体のしくみの違い」, 「第二性徴」, 「月経」, 「精通」)は、表1-1から表4-2が示す通り両者ともに小学校高学年から知識を習得し、「学校の授業」や「親」から情報を得ている割合が多いことが分かる。つまり、身体の成長発達に伴い「学校の授業」や「親」から教授されていることがうかがえる。

また「月経」の項目は健常児と比較して知的障害児は「親」から情報を得ている者が少ない。他の性知識と比較しても、「月経」の知識は健常児の女子の場合、「学校の授業」の次に「親」を情報源としている者の割合が多く、「月経」になる以前から「親」が教えていることが考えられる。しかし、知的障害児の「親」は「月経」について教えにくく、「学校の授業」や他の情報源から知識を先に習得していることが推測される。そのため、「月経」が起こった後に「月経」について習得している者が多いことが考えられる。

「精通」の項目は「学校の授業」以外で健常児は「友人」, 「雑誌」を情報源としている者が多く、知的障害児は「テレビ・ビデオ」が上位であることが分かる。つまり両者ともに、「学校の授業」以外ではマスメディアや友人を通して知識を得ている者が多く「親」や「兄弟・姉

妹」などの家族とは話しにくい内容であることがうかがえる。それは「夢精」など知らぬ間に「精通」が起こり、「親」には聞きにくいことであっても同世代の「友人」には相談や話をする事ができると推測できる。

表 1-1 「男子と女子のからだのしくみの違い」
習得時期

	知的障害児 (n=108)		健常児 (n=173)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	2	1.9	2	1.2
小学校低学年	8	7.4	8	4.6
小学校高学年	52	48.1	108	62.4
中学校	34	31.5	51	29.5
高校	12	11.1	4	2.3
合計	108	100.0	173	100.0

表 1-2 「男子と女子のからだのしくみの違い」
情報源

	知的障害児 (n=106)		健常児 (n=165)	
	度数	%	度数	%
親	11	10.4	2	1.2
兄弟・姉妹	0	0.0	1	0.6
友人	3	2.8	32	19.4
雑誌	4	3.8	12	7.3
テレビ・ビデオ	10	9.4	4	2.5
学校の授業	74	69.8	107	64.8
その他	4	3.8	7	4.2
合計	106	100.0	165	100.0

表 2-1 「第二次性徴」 習得時期

	知的障害児 (n=35)		健常児 (n=44)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	0	0.0	0	0.0
小学校低学年	0	0.0	0	0.0
小学校高学年	12	34.3	14	31.8
中学校	14	40.0	20	45.5
高校	9	25.7	10	22.7
合計	35	100.0	44	100.0

表 2-2 「第二次性徴」 情報源

	知的障害児 (n=38)		健常児 (n=44)	
	度数	%	度数	%
親	5	13.2	0	0.0
兄弟・姉妹	0	0.0	0	0.0
友人	3	7.9	2	4.5
雑誌	3	7.9	4	9.1
テレビ・ビデオ	4	10.5	0	0.0
学校の授業	22	57.9	38	86.4
その他	1	2.6	0	0.0
合計	38	100.0	44	100.0

表 3-1 「月経」 習得時期

	知的障害児 (n=59)		健常児 (n=157)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	0	0.0	0	0.0
小学校低学年	0	0.0	7	4.5
小学校高学年	30	50.8	119	75.8
中学校	19	32.2	26	16.5
高校	10	17.0	5	3.2
合計	59	100.0	157	100.0

表 3-2 「月経」 情報源

	知的障害児 (n=56)		健常児 (n=155)	
	度数	%	度数	%
親	7	12.5	40	25.8
兄弟・姉妹	2	3.6	3	1.9
友人	3	5.4	11	7.1
雑誌	2	3.6	0	0.0
テレビ・ビデオ	4	7.1	0	0.0
学校の授業	37	66.1	101	65.2
その他	1	1.8	0	0.0
合計	56	100.0	155	100.0

表 4-1 「精通」 習得時期

	知的障害児 (n=50)		健常児 (n=64)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	0	0.0	0	0.0
小学校低学年	6	12.0	0	0.0
小学校高学年	13	26.0	29	45.3
中学校	22	44.0	31	48.4
高校	9	18.0	4	6.3
合計	50	100.0	64	100.0

表 4-2 「精通」 情報源

	知的障害児 (n=50)		健常児 (n=61)	
	度数	%	度数	%
親	5	10.0	0	0.0
兄弟・姉妹	0	0.0	0	0.0
友人	3	6.0	10	16.4
雑誌	2	4.0	4	6.6
テレビ・ビデオ	6	12.0	0	0.0
学校の授業	32	64.0	46	75.4
その他	2	4.0	1	1.6
合計	50	100.0	61	100.0

表 5-1、表 5-2 が示す通り「マスターベーション」の知識は知的障害児、健常児ともに他の知識と比較して、知識を習得している者が少ないことが分かる。知識を習得している者は両者ともに小学校高学年から知識を習得しており、自らの身体の変化と並行して知識を習得していることが推測される。また知識を習得するまでの「マスターベーション」に関する興味、関心により習得状況が変わり、個人差が大きいことがうかがえる。加えて、情報源を見ると「学校の授業」を情報源としている者は他の性知識よりも少ないことが分かる。

さらに両者ともに習得している者が少ないものの、健常児は「学校の授業」以外では「友人」、「雑誌」を情報源としている者が約半数いることが分かる。知的障害児は「学校の授業」以外では「テレビ・ビデオ」を情報源としていることが分かる。つまり健常児は知識を習得した後も、「友人」等と「マスターベーション」について日常的に話していることが推測できる。知的障害児は、現在「マスターベーション」の知識を習得していない者も今後「テレビ・ビデオ」から知識を習得することが推測できる。

表 5-1 「マスターベーション」 習得時期

	知的障害児 (n=23)		健常児 (n=45)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	0	0.0	0	0.0
小学校低学年	0	0.0	0	0.0
小学校高学年	8	34.8	13	28.9
中学校	12	52.2	26	57.8
高校	3	13.0	6	13.3
合計	23	100.0	45	100.0

表 5-2 「マスターベーション」 情報源

	知的障害児 (n=21)		健常児 (n=44)	
	度数	%	度数	%
親	3	14.3	0	0.0
兄弟・姉妹	1	4.8	1	2.3
友人	2	9.5	14	31.8
雑誌	2	9.5	10	22.7
テレビ・ビデオ	4	19.0	0	0.0
学校の授業	8	38.1	19	43.2
その他	1	4.8	0	0.0
合計	21	100.0	44	100.0

以下、4項目（「結婚までの過程」、「性交（sex）」、「妊娠」、「出産」）は、表 6-1 から表 9-2 が示す通り知的障害児の方が早い段階から知識を習得している者が数名いるが、全体の傾向を見ると健常児の方が知識を習得している割合が多かった。

「結婚までの過程」、「性交（sex）」、「妊娠」の情報源を見ると、健常児は知的障害児と比較して「学校の授業」の次に、「友人」から情報を得ている者が多い。しかし「出産」について「学校の授業」の次に「親」が多いことから、自らが生まれるまでの経緯などを「親」と話していたことがうかがえる。知的障害児は、「結婚」、「妊娠」、「出産」は「学校の授業」の次に「テレビ・ビデオ」、「親」から情報を得る者が多く、特にこの3項目については教授する側からの意図により、画一的な内容を学んでいることが推測できる。

表 6-1 「結婚までの過程」 習得時期

	知的障害児 (n=73)		健常児 (n=125)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	2	2.7	0	0.0
小学校低学年	5	6.8	10	8.0
小学校高学年	18	24.7	44	35.2
中学校	37	50.7	55	44.0
高校	11	15.1	16	12.8
合計	73	100.0	125	100.0

表 6-2 「結婚までの過程」 情報源

	知的障害児 (n=72)		健常児 (n=121)	
	度数	%	度数	%
親	15	20.8	20	16.5
兄弟・姉妹	2	2.8	2	1.7
友人	8	11.1	20	16.5
雑誌	1	1.4	2	1.7
テレビ・ビデオ	21	29.2	15	12.4
学校の授業	25	34.7	61	50.4
その他	0	0.0	1	0.8
合計	72	100.0	121	100.0

表 7-1 「性交 (sex)」 習得時期

	知的障害児 (n=81)		健常児 (n=140)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	0	0.0	0	0.0
小学校低学年	5	6.2	3	2.1
小学校高学年	16	19.8	60	42.9
中学校	44	54.3	69	49.3
高校	16	19.7	8	5.7
合計	81	100.0	14	100.0

表 7-2 「性交 (sex)」 情報源

	知的障害児 (n=79)		健常児 (n=135)	
	度数	%	度数	%
親	8	10.1	1	0.7
兄弟・姉妹	1	1.3	0	0.0
友人	15	19.0	53	39.3
雑誌	10	12.7	14	10.4
テレビ・ビデオ	13	16.5	8	5.9
学校の授業	28	35.4	54	40.0
その他	4	5.0	5	3.7
合計	79	100.0	135	100.0

表 8-1 「妊娠」 習得時期

	知的障害児 (n=106)		健常児 (n=167)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	5	4.7	0	0.0
小学校低学年	6	5.7	7	4.2
小学校高学年	38	35.8	74	44.3
中学校	48	45.3	74	44.3
高校	9	8.5	12	7.2
合計	106	100.0	167	100.0

表 8-2 「妊娠」 情報源

	知的障害児 (n=105)		健常児 (n=159)	
	度数	%	度数	%
親	19	18.0	8	5.0
兄弟・姉妹	0	0.0	1	0.6
友人	4	3.8	12	7.5
雑誌	3	2.9	4	2.5
テレビ・ビデオ	26	24.8	9	5.8
学校の授業	52	49.5	125	78.6
その他	1	1.0	0	0.0
合計	105	100.0	159	100.0

表 9-1 「出産」 習得時期

	知的障害児 (n=100)		健常児 (n=151)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	5	5.0	1	0.7
小学校低学年	7	7.1	8	5.3
小学校高学年	37	37.4	69	45.7
中学校	39	38.4	58	38.4
高校	12	12.1	15	9.9
合計	100	100.0	151	100.0

表 9-2 「出産」 情報源

	知的障害児 (n=100)		健常児 (n=144)	
	度数	%	度数	%
親	22	22.2	14	9.7
兄弟・姉妹	2	2.0	0	0.0
友人	5	5.1	9	6.3
雑誌	4	4.0	3	2.1
テレビ・ビデオ	27	26.3	10	6.9
学校の授業	38	38.4	108	75.0
その他	2	2.0	0	0.0
合計	100	100.0	144	100.0

表 10-1 から表 12-2 が示す通り、「避妊」、「中絶」の知識については、知的障害児は習得状

況が他の知識と比較して特に少なく、両者ともに「売春」は習得状況が少ないことが分かった。「売春」については両者ともに「テレビ・ビデオ」を情報源としている者が多く、「テレビ・ビデオ」からの情報だけであると、内容により「売春」についての考え方がいかようにもとらえられることが考えられる。売春について正しく知識を習得していないと知的障害児、健常児ともに「売春」を、また「売春」に近い行動を知らぬ間に起こしてしまうおそれがある。そのため、特に「売春」についての正しい知識を習得することは今後の生活においても重要であると考えられる。

表 10-1 「避妊」 習得時期

	知的障害児 (n=35)		健常児 (n=154)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	0	0.0	0	0.0
小学校低学年	1	2.9	1	0.6
小学校高学年	8	22.9	29	18.8
中学校	24	68.5	93	60.4
高校	2	5.7	31	20.2
合計	35	100.	154	100.0

表 10-2 「避妊」 情報源

	知的障害児 (n=35)		健常児 (n=144)	
	度数	%	度数	%
親	5	14.3	2	1.4
兄弟・姉妹	0	0.0	1	0.7
友人	4	11.3	29	20.1
雑誌	3	8.6	7	4.9
テレビ・ビデオ	8	22.9	4	2.8
学校の授業	15	42.9	100	69.4
その他	0	0.0	1	0.7
合計	35	100.0	144	100.0

表 11-1 「中絶」 習得時期

	知的障害児 (n=29)		健常児 (n=144)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	0	0.0	0	0.0
小学校低学年	2	6.9	0	0.0
小学校高学年	6	20.7	21	14.6
中学校	15	51.7	88	61.1
高校	6	20.7	35	24.3
合計	29	100.0	144	100.0

表 11-2 「中絶」 情報源

	知的障害児 (n=29)		健常児 (n=138)	
	度数	%	度数	%
親	6	20.7	5	3.6
兄弟・姉妹	0	0.0	1	0.8
友人	2	6.9	9	6.5
雑誌	1	3.4	6	4.3
テレビ・ビデオ	6	20.7	18	13.0
学校の授業	13	44.8	98	71.0
その他	1	3.4	1	0.8
合計	29	100.0	138	100.0

表 12-1 「売春」 習得時期

	知的障害児 (n=30)		健常児 (n=61)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	1	3.3	0	0.0
小学校低学年	1	3.3	1	1.6
小学校高学年	5	16.7	9	14.8
中学校	18	60.0	48	78.7
高校	5	16.7	3	4.9
合計	30	100.0	61	100.0

表 12-2 「売春」 情報源

	知的障害児 (n=30)		健常児 (n=61)	
	度数	%	度数	%
親	2	6.7	0	0.0
兄弟・姉妹	0	0.0	0	0.0
友人	4	13.3	12	19.7
雑誌	2	6.7	4	6.6
テレビ・ビデオ	16	53.3	29	47.5
学校の授業	4	13.3	15	24.6
その他	2	6.7	1	1.6
合計	30	100.0	61	100.0

表 13-1 から表 14-2 が示す通り、「後天性免疫不全症候群（エイズ）」、「性感染症」の知識は両者ともに小学校高学年から中学校にかけて「学校の授業」から情報源を得ている割合が多い。特に健常児の「後天性免疫不全症候群（エイズ）」、「性感染症」の知識の情報源は約 9 割が「学校の授業」であり、これは自身の身体を守るという意味から保健体育の授業等で取り扱いやすい内容だと推測できる。

知的障害児は「学校の授業」の次に「テレビ・ビデオ」を情報源としている者が多く、情報源の「その他」の項目では「14 才の母」と回答した者もあり、近年放映されているドラマ等の影響により知識を得ていることがうかがえる。

表 13-1 「後天性免疫不全症候群（エイズ）」

	知的障害児 (n=67)		健常児 (n=161)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	0	0.0	0	0.0
小学校低学年	4	6.0	2	1.2
小学校高学年	19	28.4	25	15.5
中学校	35	52.2	114	70.8
高校	9	13.4	20	12.4
合計	67	100.0	161	100.0

表 13-2 「後天性免疫不全症候群（エイズ）」

	知的障害児 (n=67)		健常児 (n=155)	
	度数	%	度数	%
親	5	7.5	0	0.0
兄弟・姉妹	0	0.0	0	0.0
友人	1	1.5	3	1.9
雑誌	0	0.0	3	1.9
テレビ・ビデオ	23	34.3	17	11.0
学校の授業	35	52.2	131	84.5
その他	3	4.5	1	0.6
合計	67	100.0	155	100.0

表 14-1 「性感染症」 習得時期

	知的障害児 (n=47)		健常児 (n=151)	
	度数	%	度数	%
幼稚園・保育園	0	0.0	0	0.0
小学校低学年	1	2.1	0	0.0
小学校高学年	4	8.6	9	6.0
中学校	34	72.3	104	68.9
高校	8	17.0	38	25.1
合計	47	100.0	151	100.0

表 14-2 「性感染症」 情報源

	知的障害児 (n=47)		健常児 (n=146)	
	度数	%	度数	%
親	1	2.1	0	0.0
兄弟・姉妹	0	0.0	0	0.0
友人	2	4.3	4	2.8
雑誌	4	8.5	2	1.4
テレビ・ビデオ	11	23.4	6	4.2
学校の授業	27	57.4	133	91.8
その他	2	4.3	1	0.8
合計	47	100.0	146	100.0

2 性知識の習得状況

表 15 は性知識の習得状況について t 検定の結果である。表 15 から、健常児と比較して知的障害児は特に「マスターベーション」、「避妊」、「中絶」、「売春」等の主に望まない妊娠や自身の身体を守るための知識について習得している者が少ないことが分かる。また知的障害児は「性交(sex)」の知識の習得について他の知識と比較すると上位であることから「避妊」等をせずに「性交(sex)」を行っている者がいることが推測できる。知的障害児は情報源も「学校の授業」以外では「テレビ・ビデオ」等が半数を占め、教授する側の画一的な情報だけでは知的障害児が正しい性知識を習得されているとはいきれないため、今後正しい知識を習得する必要性が考えられる。

また「マスターベーション」の知識については、知的障害児、健常児ともに習得している者の割合が少ないことが分かる。「マスターベーション」に対する興味、関心の個人差によって習得状況が異なることがうかがえる。知的障害児の情報源をみてもばらつきがみられ、「マスターベーション」について様々な情報源から知的障害児は情報を得ていることが分かり、「学校の授業」では教授されにくい内容であることが考えられる。

表 15 性知識の習得状況

	知的障害児		健常児		t-SCORE	P
	MEAN	S.D	MEAN	S.D		
(1) 男子と女子の体のしくみの違い	3.57	1.18	3.84	0.49	-3.033	**
(2) 第二性徴	2.25	1.27	2.52	1.03	-2.225	**
(3) 月経	2.59	1.46	3.76	0.94	-9.341	***
(4) 精通	2.48	1.31	2.87	0.99	-3.240	**
(5) マスターベーション	1.96	1.20	2.90	1.21	-6.097	***
(6) 結婚までの課程	3.03	1.37	3.57	0.73	-4.841	***
(7) 性交 (sex)	3.15	1.46	3.72	0.56	-5.131	***
(8) 妊娠	3.55	1.27	3.86	0.52	-3.186	**
(9) 出産	3.45	1.27	3.76	0.58	-3.156	***
(10) 避妊	2.17	1.29	3.72	0.72	-14.604	***
(11) 中絶	1.97	1.23	3.61	0.79	-8.377	***
(12) 売春	2.04	1.24	3.42	0.90	-9.713	***
(13) 後天性免疫不全症候群 (エイズ)	2.84	1.51	3.78	0.54	-15.384	***
(14) 性感染症	2.44	1.33	3.71	0.57	-12.457	***

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

5. まとめ

本研究は知的障害児と健常児の性知識の習得時期、情報源の実態及び習得状況の差異を明らかにすることを目的とした。

本研究の主な結果は、以下の通りであった。

1 「結婚までの過程」, 「性交 (sex)」, 「妊娠」, 「出産」については知的障害児の方が早い段階から知識を習得している者が数名いるが、全体の傾向を見ると健常児の方が早くから知識を習得している者が多かった。

2 情報源については、健常児は 14 項目中 8 項目が「学校の授業」, 「友人」から知識を習得している割合が多かった。そのため、情報を習得した後も日常的に友人と性に関する会話をしていることが推測される。しかし「月経」の項目については、「学校の授業」の次に「親」が情報源として多かったことから、健常児のなかでも特に女子については身体の性徴に伴う変化の際は「親」に相談等をしていることが分かる。これは、「月経」は女性であれば思春期に生じるので身近で、かつ同性の母に話をしていることがうかがえる。

また知的障害児は、14 項目中 8 項目について「学校の授業」の次に「テレビ・ビデオ」, 「親」が多かったことから健常児よりも「親」と性知識について話していることがうかがえる。しかし、「テレビ・ビデオ」の情報だけが正しい知識を提示している保証は 100%ではないので、正しい知識を習得しているかどうかは曖昧な状況であることが推測できる。

さらに全体的に健常児は「学校の授業」の次に「友人」から性の知識を習得している者が多いことから、性に関する経験や体験等、心の葛藤や悩みを友人と共有し、情報交換をしていることがうかがえる。つまり、健常児は他者と話すことにより自ら情報を選別し、自ら望む性の知識を習得していることがうかがえる。

知的障害児は「学校の授業」の次に「テレビ・ビデオ」や「親」等の情報といった教授される側の意図的であり、画一的な情報提供を情報源としている者が多いことから、知識を得た時に悩みや葛藤を相談し、共有できる環境が少ないことがうかがえる。

そのため、特に知的障害児こそ個に配慮し、柔軟な支援が望まれることが考えられる。つまり、今後は性の知識について情報提供するだけでなく、さらに個に配慮した支援方法や教授方法を考えていく必要性が挙げられる。また性の知識について教授する者は、性の知識というプライベートに関わる情報として、特に倫理観や配慮事項を念頭におき、教授しなければならないと考えられる。

3 本研究で調査した性知識の習得状況では、健常児と比較して全て知的障害児の方が習得していないという結果であった。そのため、今後健常児だけではなくさらに知的障害児が性知識を習得する過程において、正しい性知識を習得することが重要であるといえる。つまり、現在から少しずつ性の知識を習得するには、習得するための機会を設けるべきである。例えば、学校教育だけではなく、専門家による授業または講座を行う機会を設ける、性に関する支援の環境整備、性知識の情報取得方法の検討、性の支援者の研修制度を整えるなど、検討する必要があると考えられる。

また知的障害児、健常児共に「マスターベーション」、「避妊」、「中絶」、「売春」等、学校のなかでは教授されにくい知識も挙げられた。さらに自分で自身の体を守っていくためには、偶発的に知識を知って知識を得るというレベルではなく、偶発的に知識を習得したとしても正しく勉強する機会を設ける必要性も考えられる。

そして本調査は高校生についての比較検討であったので男女差、他の障害のケースにおいても、今後詳細に検討していくことが必要である。

引用・参考文献

- 1) 木戸久美子 林隆 吉田一成 1998年 「発達障害児に対する性教育の現状—指導者の性に関する意識・関心と指導内容の関係—」 山口大学 研究論叢 芸術・体育・教育・心理 第48号 p.271-282
- 2) 光本恵子 番内和枝 久保田君江 草野恵子 高田佳子 松谷勝世 南谷佐知子 2004年 「高校生の性知識と情報源に関する調査」 思春期学 第22巻 第3号 p.353-359
- 3) 財団法人日本性教育協会 2007年 小学館 『「若者の性」白書—第6回 青少年の性行動全国調査報告—』
- 4) 林隆, 市山高志, 西河美希, 古川漸, 木戸久美子, 市山和美 1998年 「発達障害児に対する性教育の取り組み—アンケートによる養護学校における性教育の実態調査—」 障害者問題研究 第25巻 第4号 p.322-329

「性の知識の習得過程に関する研究」(柳澤志萌・綿祐二)

- 5) 児島芳郎 1998 年 「全国調査にみる性教育の現状と課題」 障害者問題研究 第 25 卷 第 4 号 p.314-321
- 6) 谷口明広 1998 年 『障害をもつ人たちの性—性のノーマライゼーションをめざして』 明石書店
- 7) 生瀬克己 1999 年 『日本の障害者の歴史 近世篇』 明石書店
- 8) 高木雅史 1998 年 「優生学の歴史と障害者の生きる権利」 障害者問題研究 第 25 卷 第 4 号 p.340-349
- 9) 文部科学省 2005 年 『義務教育諸学校における性教育の実態調査』
- 10) 江田裕介, 田川元康, 松本美穂 2000 年 「障害児の性および性教育に対する教師の意識」 上越教育大学障害児教育実践センター紀要 第 6 卷 p.19-27
- 11) 松本清一 1999 年 小学館 『性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング』
- 12) 三井善止 1999 年 玉川大学出版部 『新生と性の教育学』
- 13) NHK 2002 年 「日本人の性プロジェクト」 『データブック NHK 日本人の性行動・性意識』
- 14) 高橋克典 谷内孝行 丸山晃 2002 年 『障害をもつ人たちの権利』 一橋出版

(2008.12.10 受理)